

【高齢者の生きがい】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

(12) 日常生活を見る④

どの国においても基本的に考え、生きていくにはお金が無くては生活ができませんし、毎日が悲しく・寂しいことに繋がっていくことが一般的ではないでしょうか。

そのお金を持っているのか、いないのか、どれだけあれば生きていけるのか、本当に生活に必要なベターな回答が容易されているのか、生きる権利はあるがそれは何なのか、個人差が大きく、環境が異なり、千差万別であり、いろんな生き方があり、満足感の感じ方も大きく異なり、生きる意味の感じ方・捉え方も大きく異なることが予想されます。

過去の人たちの思い事実、どこに住んでいたかのその時代その環境の事実、何が人間らしい生活だと思っていきていたのでしょうか。

そこには生きがいが感じ取れたのでしょうか、何が悩みだったのでしょうか、どう解決したのでしょうか、どう妥協したのでしょうか、いろんな疑問が湧いてきます。私の歴史の勉強からでは、はっきりしたことが明確にならないし、疑問だらけです。生きてきた事実はあるでしょうが、心の問題は特に難しいものなのでしょうが、誰も教えてくれないのも事実です。そこには宗教があったのでしょうか、はっきり私には感じ取れませんし、このような問題はなかなかスッキリするようなことでもないとも思います。

何を考えて生き、何を望んで生き、何を悩んで生きていたのか、本当は自然体で生きていくことを継続させることに注意していたと思います。また、言い換えれば、考えもハッキリしない状態で、毎日を何とか生きようとし夢見て生きていたのでしょうか。

今も昔も変わらないのは、毎日を生活するにあたって悩みを持って生きていくことであり、そのことで疲れてしまうことであり、悩まないような生活を送ることができるかどうかにかかってくると思います。その内容をよく見ると、あまり深刻にものごとを捉え、自分で悩みを増やしてしまうことは、避けることが必要であり、ある意味では、何とか毎日が死ぬことなく生活ができることが可能だと思うことであり、なんとかなるさという精神も必要になってくるのが過去からあり、実行されていたと思うし、人の所為、社会の所為だとして生きてきたところもあると思います。